

## 身体障害者の居住環境

### その1 民間分譲マンションにおける生活

若杉 幸子

1. 家事全般は他者の支援を基本にマネージメントに徹する

私は遷居直後に半身不随で車椅子の身体障害者（以下、『身障者』と略称）になった。

05年2月下旬、転院先のリハビリ専門病院を退院した。

その後数カ月は、まず自立生活の可能性を試した期間である。

私の毎日の生活のうちで自立できる行為は、就寝、起床、着替え、洗面、食事、シャワーなどである。

食事については嚥下障害があり、飲み込みが悪いため、一食に1時間程度かかるが一人でできる。

このように、寝たり、起きたり、着替えたり、食事や排泄や洗顔・シャワーなどはおおむね自立している。問題は家事全般である。家事全般が自立できない。

そこで、自分の手足を使わずに生活全般をまわすしくみや計画を立てて、人や物や時間のマネージメントに徹することで、自力で行う以上の快適な生活を可能にしようと考えた。

具体的には、食材の購入や下処理、掃除、洗濯など自立できない家事について、週単位の計画のなかで、介護保険の居宅サービスを利用してヘルパーに援助をお願いするというものである。

また、食事づくりについては、私が子育て期に行った方法を応用することにした。そして、この方法で行くと、運動協調障害のある左手を動かすことなく、右手で包丁を使うこともなく、温めるかソースなどで和えたり混ぜたりするだけで済むので、感覚のない左手が直接火や熱湯の入ったやかんなどに触れる危険も少ない。

まずは、食べて、寝て、トイレに行き、身体を清潔に保つ程度の「息ができる」生活する「最低限の生活」は、この方法でおおむね自立できる。

### 2. 住戸内のバリアフリーの状態

居住する住戸内は、母が入居した当時、すでに和室、浴室、洗面・脱衣室を除き、床は板張りで段差のないバリアフリーであった。

その後、私の入院中、妹のところにいた母がこちらに戻るにあたり、靴や下着などの着脱に必要な箇所に手すりを付けて使いやすくし、洋間のドアは引き戸に、便所のドアは取り外してカーテンに改装したので、私が退院後、ここを間借りして車椅子で移動することについてはおおむね快適な状況にあった。

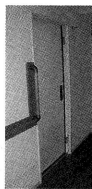
しかし、防火戸である鉄製の重い片開きの玄関ドアを自力で開閉することはできず、また、玄関（靴脱ぎ場）とドア枠との間、ドア枠と共用部分の廊下との間には段差があり、車椅子を自力で移動させて住戸から外に出ることはできない。

### 3. 共用部分の状態

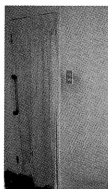
共用部分についてみると、前述の



住戸内のバリアフリー  
快適なフローリング



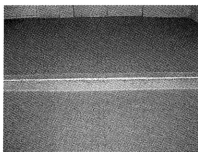
洋間の開きドア  
を引き戸に改造



トイレのドアを取り  
外してカーテン  
に改造



ドアと共用廊下との間の段差



段差がある2階エレベーター前



各号棟の繋ぎ目部に  
ある段差



傾斜のきつい1カ所  
しかないスロープ



建物敷地と公道との間  
の段差

通り、ドア枠と共用部分の廊下との間には段差がある。

また、マンションにはエレベーターがあるが、私が居住している2階の場合、共用廊下とエレベーターホールとの間に段差があり、さらに、1階にあるスロープまで行く間の各住棟の継ぎ目部分に数カ所、段差がある。

中央玄関にはスロープがないうえ、ドアは引き戸でなく、両開き戸のため、自力では車椅子を利用できない。また、仮に、杖を使って歩行できるようになったとしても、杖を持たない障害のある片方の手でドアを開けることはできないので、結局中央玄関から自力で外に出ることはできない。さらに、たった1カ所あるスロープは、傾斜がきついいため、右手のみで車椅子を運転する私には、スロープを降りるときはスピードがつきすぎ、昇るときは昇りきれない。また、スロープに付けられている手すりが途中で途切れているため、杖での上り下りは安全面から勧められない。

このように、現状の共用部分の設備や構造では車椅子を利用して自力でマンションの1階に降りること

も、杖を使ってマンションの通路に出ることもできず、だれかの介助がなければ住戸内に閉じ込められたままの生活が強いられることになる。

#### 4. 敷地内通路と公道の状態

介助者にスロープを降ろしてもらうと、そこはアスファルトのマンション内通路であり、比較的平坦で自力で車椅子を利用することができ

る。しかし、マンション内通路の先にある公道との間には段差がある。さらに、公道は中央が高く両側の排水溝に向けて傾斜している。車椅子は傾斜するので中央を走行せざるを得ず、もちろん自力での走行はできない。

以上、居住する民間分譲マンションでは、住戸内のみが自力で車椅子歩行が可能であるが、共用部分のバリアフリー化が不完全なため、住戸を一步外に出るところから断続的ではあるが介助者が必要な状況にある。

#### 関連著書

\*「震災・空襲を生き抜いた女性の記録―職人の家に生まれて―」02年12月25日、自主出版ネットワーク…本の風景社発行／(株)ブックキング発売

\*「住み手による住環境計画―その特性と地域分権化への期待―」05年2月28日、相模書房発行

07年4月に退院後2年間の生活記録(「還暦直後障害者になった私―快適な居住を求めて―」、A5判にして150ページほど)を以下のホームページに公開した。

<http://www.geocities.jp/swakasugi2007>

若杉幸子 1944年東京都江東区深川木場生まれ、地域生活研究者。77年以降、コミュニティ建設計画への住民参加、コポーラティブ住宅建設、マンション建設反対運動、集合住宅の建て替えにおける居住者運動などを支援。04年右脳幹部の血管腫摘出手術により身体障害者となる。日本女子大学卒、千葉大学大学院、東京大学大学院修了、工学博士。